

東京鷹桜同窓会報



「夕鶴の里」(南陽市漆山)

卷頭の言葉

沓澤 昇

東京鷹桜同窓会幹事長



東京鷹桜同窓会の幹事長を仰せつかって3年になるが、総会開催を成功させるための役割を幹事長として果たせたかとなると甚だ自信なく、申し訳ない気がする。右肩下がりの厳しい経済環境下でも、総会の出席会員数を前年レベルに維持できているのは、学年幹事・事務局の皆様方のご努力によるものである。出席者の顔ぶれに若い世代・新顔が増え、その上に出席者数の拡大があれば理想的なのだが、ここ数年を見ると、新顔の出席者が増えている感じはしない。年1回の総会開催は最重要イベントとして当然今後も継続すべきである。それとは別に、会員相互の交流が日常的に出来て、継続的に会員の意識を繋ぎとめ得るような仕組みを作れば、これが新しい顔ぶれ・若い世代の参加意識を刺激し、同窓会活動の活発化につながるのではないだろうか。その方策として、会員相互の日常的な交流拠点となる東京鷹桜同窓会のホームページの開設が考えられる。サイトの開設・運営等の問題は衆知を集めて解決するとして、ぜひ実現させたいものである。今年の総会は間近、今回もまた多数の出席者と新しい顔ぶれを集めて成功させたいものである。

(昭和31年卒)

わが道を行く



出会いと歩み

鈴木 勉

星薬科大学教授

私は昭和43年に長井高校を卒業して、東京の星薬科大学に入学しました。実家は農家で経済的にもゆとりがなく、同年3月下旬に大田区の立会川にある朝日新聞の専売所に入所し、住み込みで新聞配達をしながら大学に通いました。しかし、途中で体調を崩し、その時「家にいらっしゃい」と優しく声を掛けて下さったのが渋谷利蔵先輩です。しばらく、馬込の渋谷先輩の工場の2階に住まわさせて頂きました。その後、大学の近くに移り、今度は東京新聞の配達をしながら大学に通いました。大学卒業後は、兄（輝二郎40年卒）の影響もあり、大学院に進み現在の基礎となる研究（薬物依存）に従事しました。私の大学時代の恩師である柳浦才三先生は医学と薬学を修めておられ、たいへん教育熱心な先生でした。研究テーマを戴く時、先生の医学部時代の友人、中嶋宏先生（前WHO事務局長；当時日本ロシュ株部長）から今後薬物の毒性が問題になるから薬学でこの問題に取り組んだらどうかとの意見を戴き、教授から「君には薬物依存をやってもらおう」ということで決定しました。これが一生のテーマになるとは当時想像もできませんでした。

大学院の生活は新聞配達をやりながらというわけにはいかず、不定期に鉄屑の回収やコカ・コーラの配達などをやりながら、2年間の研究生活を過ごしました。この時お世話になった伴幸金属の金沢民雄さんは、毎月奨学金を出して下さいました。しかし、何もしないでお金を戴くわけにはいかないとお話ししましたところ、金沢社長は医薬品の動向を毎月レポートしてくれればよいということで、毎月レポートを持参し、お酒を戴きながら色々なお話を伺うことが出来ました。

こうして大学院を修了し、就職は中嶋宏先生の日本ロシュ株研究所にお世話になり、新薬の開発研究に従事しましたが、やがて研究を仕事にしてゆくためには博士の学位がないとやっていけないと感じ、2年間で退社し、再び星薬科大学大学院博士課程に入学しました。この時は、授業料を免除して戴き、さらに結婚し、妻は日本ロシュに勤めながら、週末には二人で家庭教師、金沢奨学金の再開などにより研究生活を継続することができ

ました。博士課程修了後は柳浦教授が教室に助手として残りなさいと言ってくださいり、30歳にしてようやく定職に就いたような気がします。

その後、昭和59年から2年間は、アメリカのミネソタ大学医学部神経精神医学教室およびメリーランド州にある国立薬物乱用研究所に留学し、私のボスであるマイッシュ教授には大変お世話になりました。その時の逸話を一つ御紹介します。ミネソタの冬は厳しく-40度にもなります。ある日、テレビから大雪（ブリザード）のため外出しないようにとの警報が流れておりました。しかし、私の研究は慢性的な実験で休めばこれまでの苦労が不意になってしまって、無理して大学まで出て実験を行ないました。すると、マイッシュ教授とジョージ博士が日本酒を抱えてこられ、やはりベン（勉）は実験をやっていたかと言ひながら日本酒をビーカーに入れ、ヒーターに乗せて燭をつけ、飲ませてくださいました。この時ほど、日米の文化の違いはそれほどなく、人の心は同じだと強く感じことはありません。

帰国後も薬物依存の研究を継続し、平成元年には学会の奨励賞なども受賞し、翌年に講師、4年後に助教授に昇格しました。そして平成11年1月からは、本学前学長の南原利夫先生に薬品毒性学教室を新設して頂き、初代教授に就任致しました。最近の大きな仕事に、平成13年11月16日付けの朝日新聞・天声人語に掲載された「がん疼痛薬とモルヒネ依存」の研究があります。また、今年からはWHOの薬物依存専門委員会委員に就任し、9月にはジュネーブに出かけます。これも中嶋先生が事務局長をお勤めになられていた機関であり、深い御縁を感じずにはいられません。

長井高校卒業後、このような出会いと歩みをして参りました。驚いたことに、平成11年4月に私の同級生、遠藤隆夫さんの娘の理香さん（平成11年卒）が本学に入学され、さらに卒業論文作成のため私の教室に入られました。最近、このような出会いの喜びを強く感じております。私を育てて頂いた先輩や先生方のようには出来ないかもしれません、夢多い学生を育て、支援していきたいと思います。
(次頁に写真、昭和43年卒)

'01東京鷹桜同窓会スナップショット ('01 11月17日 飯田橋・摩天楼大飯店)



お元気な高橋正二顧問が乾杯の音頭。



高橋俊龍会長が古曲の梅津ふじさん（昭和27年卒）を紹介。



杏澤昇幹事長がエール交換。



山口のぶ先生の指揮で恒例の校歌齊唱。



鈴木勉さん(2頁参照)が遠藤理香さん(平成11年卒)を紹介。



二次会は「もー吉」で山形料理をツマに談笑。

故郷・新名所・再発見 ～夕鶴の里～

遠 藤 剛

東京鷹桜同窓会編集委員会
(株)アスキー出版営業局長

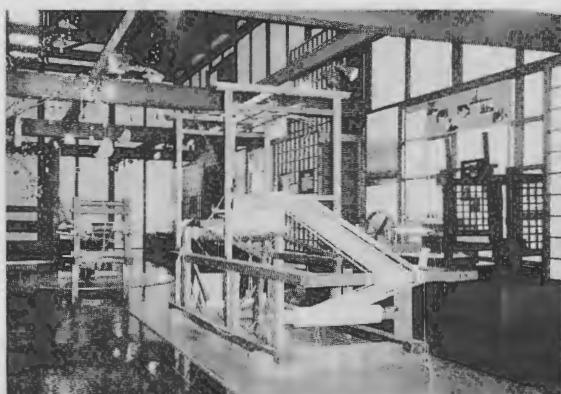


今回は長井を離れて南陽市漆山の「夕鶴の里」を紹介します。我々のふる里、置賜地方には、多くの民話が語りつがれています。その中でも漆山にある珍藏寺には、木下順二さんが戯曲化し舞台公演などで広く知られる「鶴の恩返し」が語り伝えられています。「民話の心を今に伝える」をテーマに、「夕鶴の里」漆山に平成5年4月、資料館と語り部の館の2館構成でオープンしました。

資料館でまず驚かされるのは、マルチスライドで映し出される「鶴女房」の物語です。主人公の「つう」と「金蔵」が、まるで実在の人物のようにスクリーンに現われます。デリケートな仕草にもの哀しさを感じる内容です。また「金蔵の家」として置賜地方の古い農家の内部が復元されています。どこか懐かしい感じがして、幼い日の生活を思い出される方も多いと思います。

資料館では織機などの民具も見られますし、舞台の「夕鶴」を37年間、1037回にわたって演じた女優、山本安英さんの資料も見られます。語り部の館では、地元ボランティアグループによる民話の実演を聞いたり、機織りを体験することもできます。帰郷の折りには、いちど御家族で見学されてはいかがでしょうか。

(昭和49年卒)



住 所：〒992-0474 南陽市漆山2025-2

電話 0238-47-5800

入館料：大人310円・小中学生100円

開館時間：9時～4時30分

休 館 日：毎週月曜日（祝日の場合は翌火曜日）、年末年始

交 通：フラーー長井線おりはた駅徒歩10分

川野カツさんの長寿の秘訣



このたび当会に多大な御寄付を頂きました。御高潔なる志に敬意と感謝を申し上げます。多少足もとが御不自由な点をのぞいて、かくしゃくとして自立した生活を送られている御様子でした。昭和2年卒、93歳の大先輩にあやかりたく具体的に長寿の秘訣をお伺いしてきました。

[一日のスケジュール]

朝 6時起床、午前中1時間、午後1時間昼寝。

夜 11時就寝。

[毎朝欠かさない献立]

御飯は一膳、具だくさん（里芋、その他）のみそ汁（山形自家製の味噌）、納豆（ちりめんじやこ、ねぎ、しじみの佃煮、四万十川の青海苔佃煮、白ごま）、生卵1個、塩コンブ3枚、梅干し1個、トマト1個、青菜のおひたし。

昼食、夕食は量は少なめに何でも頂かれるそうです。

また、朝起きてきて1杯、夕方から夜にかけて2杯、毎日水を飲むことを心掛けていらっしゃるそうです。
△好きなテレビ番組はチャンバラ、サスペンス。

△趣味は、うたい（謡）を月1回のペースで楽しまれることだそうです。20年以上やらないと本当のうたいの声にはならないとのことでした。

要するに、規則正しい生活、腹八分目、ストレスを貯めない、大声を出すことだそうです。言いふるされてわかっているようなことですが、毎日実践されている方の重みを感じ改めて得心がいく思いがしました。これからも“当会の宝”として、ますます長寿を全うして頂きたいと願うばかりです。（事務局長・安部俊彦）

若手事務局員を紹介します —とくに昭和50年卒以降の皆様へ—

那須 優則 (事務局・会計担当)



事務局の主な年間活動は会報の発行、総会・懇親会および学年幹事会の開催です。安部俊彦事務局長（昭和46年卒）を中心に各自ムリをせず適切に協力しています。毎年35歳以上の3,300名の会員に会報等を郵送しています。年会費は会員の1/4の約850名の方が送ってくださり、この会に賛同されておられます。この割合については各自で分析してください。30~40歳代は仕事上重要なポジションつく世代です。だからこそ同窓生の親睦が必要です。現在の事務局の活動は主に安部事務局長の経営する山形料理の店“もー吉”（新宿区神楽坂2-10 tel 03-5261-2128 e-mail: mo-ichi@sepiaplala.or.jp 飯田橋駅より歩いて2分）が拠点です。お店の宣伝ではなく事務局の宣伝です。長井弁を使



後列左から高橋俊龍会長、北村成子、山口智明、中山和弘、権代みち子、中列左から三上陽子、遠藤剛、佐藤いく子、前列左から阿曾亮子、斎藤隆、大友茂之、藤野由美子、安部俊彦の事務局メンバー。

って食事しようかと思っている方、同級会等で宴會場を探している方、たまにあれば事務局を手伝つてもよいと思われる方はお店に来られて気軽に声をかけてください。も一吉で「長井高校事務局に参加！」といわれたらサービスしてもらうよう頼んでおきます。今年の総会にぜひ出席してみてください。会長に頼んで2次会費用を何とかしてもらいます。

（昭和49年卒）

白鷹が舞うふる里の原風景

丸川 満

東京鷹桜同窓会編集委員
株愛智出版社長



「天に北斗の光あり」に始まる
我ら長井高校の校歌を、私たちは
入学式の時から卒業式までの間、
様々なイベントで歌ってきました。
卒業後も、同窓会で毎年歌い
続けております。

在校時代も卒業後も、私はこの校歌の歌詞の意味を深く考えたことはありませんでした。しかしここ数年、折に付けて校歌について考えることがありました。一番は、天の北斗七星を仰ぎ見て宇宙に開眼し、緑の山河・自然との共生を図り、富や権力などに惑わされることなく、万物の真理や個人の理念を追求することを主張しております。二番は、銀河系の星の光に照らされて、山々が美しい紅葉に輝く実りの季節に、悠然と天空を舞う白鷹のように、力強く自らの理想に向かって突き進んでゆくことの大切さを教えております。

私は、何年か前から歌詞のなかの「白鷹」とはいったい何なのだろうかと考えるようになりました。全身を純白の羽毛で包んだ二羽の鷹が、校舎が建っている早苗ヶ原一帯の上空を、まるで舞うように飛んでいたのであろうかと、とりとめもなく想像してみたりするのです。そして、私の出身地の白鷹町や白鷹山のことが、いつも連想されて思い出されて来るのです。白鷹山は、私が生まれ育ち上京するまで、毎日眺めて来た山です。今は亡き父と母のように親しみを持って想う「ふる里の山」なのです。この山と里の天空には、その昔白鷹が悠然と舞い、鮎貝から白兎、早苗ヶ原、さらに川西、米沢に至る天空を飛翔していたのではないかと、そんな風に思われてなりません。

ところで、白鷹町に生まれ育った私は、白鷹山に別の呼び名があることを一年前まで知りませんでした。聞いたことはあったかもしれません、記憶には全く残っていないのです。昨年の七月、中学時代の恩師、吉田秀先生（長井市在住）から『口語訳 作谷澤誌 全』という本を戴きました。この本を読んでみると、山の向こうの村山地方では、一般的に「虚空蔵山」と呼んでいると書いてありました。また『白鷹山大藏寺大満虚空菩薩縁起』には、次のように書いてあるそうです。

「持統天皇の時代、役行者が出羽国羽黒山へ登る道中、この山に靈感を覚えて、足を止めてよじ登って行った。そして山靈が現われるよう熱心に祈ったところ、彩雲がたなびき、輝く光輪の中に虚空蔵菩薩の尊い姿と三五仏が現われた。役行者はひれ伏し小さなお堂を造った。それから四十年あまり後、名僧の行基が諸国行脚でこの山の麓まで来て、一羽の白い尾の鷹が高く低く、十三回も飛び去ってはまた帰って来る姿を見たという。」

持統天皇や行基の時代ですから、天平時代（八世紀頃）のことであり、因みに行基は東大寺大仏の建立に関わった名僧であります。このような伝説が白鷹山の別の顔、虚空蔵山に伝えられていることから、私はふる里の歴史の奥深さを思い知らされました。もっとも、白鷹飛翔をもってこの山の起源とするのはこじつけであって、平たく高く見えるので平高山と呼んでいたのが、訛って白鷹山になったのであろうという説もあるそうです。それはともかく、「神の鳥」白鷹を敬う村人にとつて、虚空蔵菩薩を安置するお堂がある白鷹山は、五穀豊穣と村社会の安泰を祈願する“神の山”であったに違いありません。

それから約千年も経った江戸時代のことです。経済の破綻から藩の存亡の危機にあった米沢藩を構造改革で建て直したあの上杉鷹山公が、近習の佐藤文四郎と山口新介を供にして藩内をくまなく見まわり、指導に当たっていました。そして、死の國、灰の國だった米沢藩が緑と紅の色に染まり美しい國に蘇ったことを、板谷宿に遠出をした三人が述懐していた時、一羽の鷹が天を悠々と舞い、それを仰ぎ見て話す感動の情景が、童門冬二著の『小説上杉鷹山』に描かれております。この鷹が白鷹であったかどうかは知りませんが、養蚕や絹織物の育成のため、蚕桑や鮎貝、荒砥あたりまでやって来て懇切に藩民を指導していた上杉治憲公が、白鷹山の麓で白鷹の飛翔する姿に心が打たれ、晩年（五十二歳）になって、この山の下二文字を取り、上杉鷹山と名を改めたのではないだろうか。

J Fケネディも尊敬したという上杉鷹山公の理念が、“神の鳥”白鷹に二重写しになって見えるような気がしてなりません。 （昭和39年卒）



山形県立
長井高等学校
校旗と校歌

校歌

作曲：吉田一郎
作詞：吉田一郎

一

天に北斗の
光あり
地上に花の
香あり
緑の山河
崇華の夢
よテド見て
草葉の原に
そばえ立
これぞ我らの
理想郷

二

銀河の星に
照らされて
山錦錦に
映りほとゝ
雄々一玉姿
白鷹の
強き力を
双翼ト
理想の天地
前に一
希望に燃ゆ
我が健児



白鷹山の遠景

◇ 事務局からのお知らせ ◇

このたび東京鷹桜同窓会の活動のために、川野カツさん（昭和2年卒）から300万円の御寄付を頂戴しました。この使い道に関しては、8月26日に行かれた学年幹事会（52名の参加をもって開催）で報告し了承されたように、しかるべき時が来るまで別口で保管し、しかるべき手続きのもとに大事に使わせて頂くことにいたしました。川野さんからは、このことが前例となって皆さんのがんばることのないようにとのお言葉も頂いております。

事務局一同、本当に有り難く、この会をもっと楽しく実のある会にするために、ますます頑張らねばと身を引き締めているところです。ここに、東京鷹桜同窓会の皆様に御報告いたしますと共に、川野さんに重ねて御礼を申し上げます。

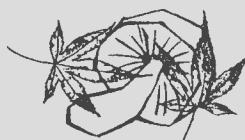
活動報告

平成13年度は、10月に総会案内発送作業を行い、11月17日㈯に飯田橋の摩天楼大飯店にて盛大に開催しました。参加者は108名でした。平成14年度は、11月23日（勤労感謝の日）に昨年と同じ飯田橋の摩天楼大飯店にて開催されます。皆様の御参加を中心からお待ちしております。

（事務局長・安部俊彦）

平成13年度会計報告

〈収入〉	〈支出〉
前年度繰越金 695,630	総会費 669,378
年会費 853,540	事務費 299,367
総会費 750,000	会議費 10,000
御祝金 110,000	印刷費 289,139
受取利息 486	通信費 305,000
	税金 96
計 2,409,656円	計 1,572,980円
	次期繰越金 836,676円



東京鷹桜同窓会報 第21号

平成14年10月1日 発行

発行人：東京鷹桜同窓会

編集委員：江原明子、遠藤 剛

丸川 満 [〒191-0065 東京都日野市旭が丘1-14-13 (株)愛智出版 電話 042-585-1014]

《e-mail: aichishuppan@pop06.odn.ne.jp》 (お原稿は e-mail が好都合です)

◇編集後記 ◇

会報の原稿執筆を依頼していて、同窓会で気さくに話をしていた方々から、様々な問題を抱えていることを告白され、ハッとさせられたことがあります。親・兄弟の看病や介護で毎月のように帰省しているとか、実家の跡継ぎ・相続問題などがあって、とても同窓会どころではないという話も聞かされました。何事も自分の身に降り懸ってこそ実感できるものですが、お互いに励まし合う心のゆとりが必要なのだと痛感します。

表舞台から姿を消した山形いや日本を代表する二人の国会議員、発癌性のある無登録農薬がラ・フランスやリンゴなどに大量に使用された事件、松坂牛・米沢牛と表示したコンビーフ缶詰に外国産の牛肉を混ぜていた寒河江市の食品加工メーカー、二度にわたる不祥事の酒田短大事件など、最近の山形にはおかしな風が吹いております。誇るべき県民性が崩れゆくのは残念なことです。

そんな中、米沢興譲館高校が文部科学省のスーパーイエンスハイスクールに指定されたという明るいニュースがありました。いつまでも、有名大学、一流企業などと言ってないで、日本人は真に科学あるいは学問に目覚める時機に来ているのかもしれません。中身が肝心なのだと思います。

編集委員の遠藤君は、毎年「故郷・新名所・再発見」と題して、様々な故郷の文化を写真と簡明な文章で紹介してくれています。550名を超える社員とその家族の生活を支える大企業の出版営業局長としての重責が彼の双肩に掛かっており、同窓会どころではないかもしれません。帰省の折に手弁当でカメラ片手に故郷の文化を探訪し、紹介してくれるボランティア精神に感謝したい。

私たち同窓生の年代差は、60~70年もの開きがあります。この“世代を超えて”親睦を深めるための第一歩は、まずお互いを知り合うことから始まります。そのために、会報では出来るだけ多くの同窓生を紹介し、また名前と顔が一致するように、顔写真や肩書きも極力載せるようにしております。随筆や提言などを寄稿されたい方は、気軽に下記の小生宛にお送り下さい。 (丸川)